

無位の真人

—まことの人—

学長 藤原了然

(一)

佛敎大学の建学の精神が、佛敎精神であることは、学則をはじめ、機会あることにしばしば力説されているところである。しかし、一たび、佛敎精神とは如何んと改めて問われることになる、その答えは必ずしも、単刀直入的には行きかねる場合にしばしば直面する。しかし、これは佛敎精神がいまいであるとか、どうにでも説明できるといったことに起因するのではなく、佛敎精神の偉大な擁護性というか、佛敎精神なるものは、如何なる場合においても随處為主するものであることを謗証するものに外ならない。

今、佛敎精神の多くのとらえ方の中で最もきびしい一相として、臨済義玄の〈無位の真人〉を伺つてみる。臨済義玄（一八六七）は、中国における臨済宗の開祖として、あまねくその人柄は知られる巨匠であるが、この人の著作である『臨済録』の中には、佛と凡夫に対するユニークな見解、人間の本質に対する峻烈な見識が示されている。

(二)

『臨濟録』の初めの部分に、佛すなわち無性の真人（まことの人）について、

「上堂。云、赤肉團上有二無位真人。常從汝等諸人面門出入。未證拏者、看看。時、有僧出問、如何是無位真人。師下禪牀、把住云、道道。其僧擬議。師托開云、無位真人是什麼乾屎橛。便歸方丈。」

はじめに、本文中の難解の語句を、朝比奈宗源師の解説による。(一)赤肉団上、われわれの生ま身

の身体、關係。(二)無位の真人、位置づけることのできない、あらゆる差別を超越した大自由、大自在の人。(三)面門、眼・耳・鼻等の全感覺器官。(四)禪牀、坐禪の時に用いる椅子。(五)乾屎橛、糞尿をかきまわす不潔な棒。

さらに解説を求めて、朝比奈宗源老師の訳註を引用すると、

「上堂して言った。(この赤肉団上に)一無位の真人がいて、常にお前たちの面門を出たり入ったりしている。まだこの真人を見届けていないものは、さあ看よ、さあ看よ」と。

その時、ひとりの禪僧が進み出て問うた。(その無位の真人とは、いったい何者ですか。)師は席を下りて、僧の胸倉をつかまえ、(さあ言え、さあ言え)と。その僧は擬議した。師は僧を突き放して、(これでは無為の真人も糞かきべら同然ではないか)。といって、そのまま居間に帰った。」

(岩波文庫臨濟録)

無位の真人に対する問いは幾たびも繰さるべきであろう。今はただ老師の解説を再思三考して頂きたい。